

原著論文

医療系大学における新入生の 大学適応感に及ぼす大学生活要因の影響

榎本 光 邦¹⁾

Influences of the college life factors on freshmen's feelings of university adaptation at medical universities

Mitsukuni Enomoto¹⁾

要 旨

我が国において、大学生の中退予防は、大学教育における喫緊の課題の一つである。中退の要因は多岐に渡るが、その中でも心理的要因である大学生の大学適応感に焦点を当て、大学適応感に影響を及ぼす大学生活の要因を明らかにする。本研究の対象は、医療系の大学に在籍する大学新入生とする。

調査の結果、医療系大学において、大学新入生は、「安心して自分らしきを出せている感覚」、「周囲に信頼され、必要とされている感覚」、「課題や目的の存在」、「劣等感の低さ」、「居心地の良さの感覚」という大学適応感を抱くことが明らかになった。これらの適応感は“大学という環境に自分の居場所を見だし、人間関係を形成していく過程”と“学業や大学での活動に対する態度”に大別されるが、前者には「友人との関係」、「教員との関係」という大学内の主要な対人関係に関する要因が正の影響を、後者にはそれらに加え「学業への取り組み」も正の影響を及ぼすことが明らかとなった。

キーワード：大学適応感、大学生活要因、大学新入生、医療系大学

I. はじめに

日本の大学進学率は1985年度に26.5%、1995年度に32.1%、2005年度に44.2%、2015年度に51.5%と年々上昇傾向にあり（国立社会保障・人口問題研究所；2015・文部科学省、2014）¹⁻²⁾、18歳人口の半数が大学に進学し、大学進学を希望すれば進学できる、いわゆる大学全入時代となっている。その一方で、我が国における大学生の中途退学率は増加傾向にある（中村・松田、2013）³⁾。文部科学省の統計である「学校基本調査」では大学入学者数と卒業者数に関する調査は行われているが、中退者数に関する項目がない。しかし、大学

入学者のおよそ一割が入学から卒業までの間に中途退学すると言われている。例えば、2005年度、私立大学において中退した学生数は約5万5千人で全体の2.9%に当たり（日本私立学校振興・共済事業団私学経営相談センター、2005）⁴⁾、その数は公立大学の約5,800人・全体の1.5%を上回った（内田、2008）⁵⁾。2007年から読売新聞が『大学の實力』というプロジェクトで大学に退学率の調査をし始め、2014年度の調査では退学率の平均は8%であり（読売教育ネットワーク、2015）⁶⁾、2011年度から朝日新聞と河合塾によって行われている共同調査『ひらく 日本の大学』では2014年度の調査では退学率は8.1%であった（朝日新聞 DIGI-

1) 群馬バース大学教養共通教育部

TAL、2014)⁷⁾。また、日本中退予防研究所(2010)は、私立大学に入学した学生の8人に1人が、卒業までに中退していると報告している⁸⁾。そして、2012年に文部科学省が初めて行った大学中退に関する全国調査では全体の2.65%の学生が1年間で中途退学しているという結果になり⁹⁾、文科省が中退防止策を検討する方針を発表するなど、大学中退問題への対応は大学教育における喫緊の課題の一つであると考えられる。

大学生の中途退学の問題は、大学側や社会全体にとっても大きな問題である。大学側にとっては、卒業までに中途退学者が払う予定だった学納金が支払われないことになる。生き残りをかけて様々な改革に取り組んでいる多くの大学にとって、こうした事態は経営上での大きなダメージとなるのが容易に想像される(井上・久田、2015)¹⁰⁾。一方、社会に及ぼす影響としては、中途退学者の正規雇用に就く割合が低下することである。独立行政法人労働政策研究・研修機構(2006)の調査によると、中退者の約7%が無職になることが明らかとなっている¹¹⁾が、こうした実態を踏まえて日本中退予防研究所(2010)は、本来納税する側の人間がそのまま社会保障の受給者となる可能性を危惧している。社会保障という観点から考えると、本来支える側であるはずの若者たちが無職のままであると、労働・納税を経ずに支えられる側となり、労働者の負担がさらに増えることになるのである⁸⁾。

文部科学省(2015)によると、2009年の学生の大学等の中途退学の理由は1位「転学(14.9%)」、2位「就職(14.4%)」、3位「経済的理由(14.9%)」、4位「学業不振(12.7%)」、5位「病気・怪我・死亡」、6位「学校生活不適応(5.1%)」、7位「海外留学(0.9%)」、「その他(31.5%)」であったのに対し、2012年の調査では、1位「経済的理由(20.4%)」、2位「転学(15.4%)」、3位「学業不振(14.5%)」、4位「就職(13.4%)」、5位「病気・怪我・死亡(5.8%)」、6位「学校生活不適応(4.4%)」、7位「海外留学(0.7%)」、「その他(25.3%)」となっており、数年の間に増加している経済的理由を中途退学の最大の要因とし、奨学金・授業料減免を拡充してきたが、なお不十分である可能性を指摘している⁹⁾。それに対して、内田(2014)は、2005年から2011年まで、中退理由を身体疾患、精神障害、消極的理由、積極的理由、環境要因、不詳の6グループに分類し、全国の大学生を対象に調査を行った。「消極的」「積極的」とは、本人の主観とは関係なく、大学教育路線に残るか離れるかの意味合いであり、「環境

要因」には経済的理由や家族の介護などが含まれる。調査の結果、中退の理由の上位3位までは一貫して変動がなく、1位が消極的理由、2位が積極的理由、3位が環境要因であり¹²⁾、文部科学省(2015)の調査結果とは異なる結果となった。その理由は、内田(2014)の調査は中退の理由を可能な限り詳細に尋ねているのに対し、文部科学省(2015)の調査では退学時に書類に記載された中退の理由をまとめているにすぎず、大学中退の理由の実状を把握し切れていないためと考えられる。例えば、太田・桜井(2003)¹³⁾や大学中退就職ガイド(2014)¹⁴⁾が指摘するように、文部科学省(2015)の調査には、表向きの理由として退学届けでは「経済的理由」を挙げつつも、対人関係や学生生活に馴染めないことで生じる孤立感や不適応感、つまりメンタルヘルスに関連すると考えられる退学も実際にはかなりの割合で内在していると考えられる。また、文部科学省(2015)の調査では、全体に占める「その他」の割合がいずれの調査においても最も多く(2009年の調査では31.5%、2012年の調査では25.3%)、その中には中退者が中退の具体的な理由を申告せず、「一身上の都合」と申告するケースも多く、それらの中には「その他」以外に挙げられている理由に当てはまるものもあると考えられる。これらのことから、文部科学省(2015)が報告した中退理由の割合が大学中退の理由を正確に表しているとは考えにくい。いずれにせよ、大学には、学生側の申し出通りに事務手続きを行い、結果として学業継続の可能性のあるケースを大学から放り出してしまうことのないよう、学生の背景にある心理学的な問題を把握し、適切に対応することが求められる(井上・久田、2015)¹⁰⁾。

大学生の中途退学率が増加する背景には、心理的要因としての大学生の適応力の低下が指摘されている(中村・松田、2012)³⁾。これまで、青年の適応感に関する研究の多くは、主に学校への適応感や不適応感に焦点を当ててきた。これらの学校への適応感や不適応感は、対人関係(友人や教師との関係)や学業などの要因の集合として測定されてきた。こうした従来の学校への適応感研究は、個人が学校生活において問題をどこに抱えているかが明確になるため、援助を目的とした場合には有益であると考えられる。だが、従来の学校への適応感研究における学校への適応感や不適応感の測定では、あらかじめ学校環境が求める要因(友人との関係、教師との関係、学業等)を研究者側が設定しているため、当該の学校環境がどのような特徴を

持っている、何が重視されているのかは考慮されていない(大久保・青柳、2004)¹⁵⁾。つまり、従来の学校への適応感研究では、友人関係や教師との関係や学業はどの学校においても等しく価値が置かれ、学校適応に対して正の影響を与えているという暗黙の仮説をもって研究されてきたといえる。従って、従来の学校への適応感研究では、友人との関係もよく、教師との関係もよく、学業にも積極的に取り組む青年が最も学校に適応していると考えられてきたのである。しかし、こうした要因の欠如は、青年が実際に学校への適応の問題を抱えていることとは異なると考えられる。現実には、教師との関係が悪くても学校への適応の問題を抱えていない青年も存在しているし、学業に積極的に取り組まなくても学校への適応の問題を抱えていない青年も存在している。つまり、従来の学校への適応感尺度による測定では、学校によっては青年が学校への適応の問題を抱えていることと一致しない可能性があるのである。このような観点で従来の学校への適応感研究をとらえ直すと、学校への適応感の因子であると考えられてきた「友人との関係」、「教師との関係」、「学業」などは、学校への適応感そのものというよりも、学校への適応感に影響を与える重要な要因という意味で適応感を規定する学校生活の要因としてとらえ直せる(大久保・青柳、2004・大久保、2005)¹⁵⁻¹⁶⁾。また、周囲から見ると適応していると思われるような学生が、自分では適応していないと考えたり、どう見ても適応していないだろうと思われるような学生が、自分では適応していると感じていたりすることがあるだろう。つまり、適応感とは主観的なものであり、その測定には個人が環境をどのようにとらえるかといった要因を含めることが有効的であると考えられる(磯部・上村、2007)¹⁷⁾。

これらのことから、大久保(2004)が適応を「個人と環境の調和」と定義し、適応と、欲求や性格特性などの個人の特徴とは無関係であると述べた¹⁸⁾ように、適応・不適応が個人の性格特性によって決まるとは考えにくい。それに対して適応感とは個人の適応の一指標としてとらえられるものであり(谷井・上地、1994)¹⁹⁾、「個人が環境と適合(フィット)していると意識すること(大久保・青柳、2003)²⁰⁾」または「環境と自分がうまくフィットしている(居場所がある)と感じること(大久保、2005)¹⁶⁾」と定義でき、適応感を測定するには、環境の要因も含めて測定する必要があると考えられる。

大久保(2005)は高等学校において、学校生活の要因(友人との関係・教師との関係・学業)と学校への適応感について学校別に検討を行い、友人関係はどの学校でも学校への適応感に強い影響を持つが、教師との関係や学業といった要因が適応感にどのように影響するかは学校によって違いが見られることを明らかにした¹⁶⁾。専門がより細分化される大学では、重要視される大学生活の要因は学部や学科で異なると考えられ、学部や学科ごとに、大学適応感やそれに影響を及ぼす要因について検討する必要がある。2014年度の朝日新聞・河合塾による共同調査では、大学在籍中に8.1%の学生が退学するとの結果が得られた。人気系統であり進学目的がはっきりしていると考えられる医療系の学部において、薬学10.7%、保健8.9%、歯学8.6%と軒並み全体の退学率を上回っていた(朝日新聞DIGITAL、2014)⁷⁾ことから、医療系の大学における大学適応感や、それに影響を及ぼす要因について検討する必要があると考えられる。

II. 目 的

我が国において、大学生の中退予防は、大学教育における喫緊の課題の一つである。中退の要因は多岐に渡るが、その中でも心理的要因である大学生の大学適応感に焦点を当て、大学適応感に影響を及ぼす大学生生活の要因を明らかにする。大学適応感や、それに及ぼす大学生生活の要因は学部や学科によって異なると考えられるが、大学生の大学適応感に関する先行研究においては、磯部・上村(2007)が保育学科と心理学科の学生の大学進学動機と学校適応感との関連について比較している¹⁷⁾が、その他の殆どの研究においては学部や学科ごとの調査・分析を行っていない。本研究では上述の理由から、学部や学科ごとの特徴を明らかにすることを重視し、全学部の退学率を上回る退学率を示す学部を持つ、医療系の大学に在籍する学生を対象とする。なお、本研究における「大学適応感」とは谷井・上地(1994)¹⁹⁾、大久保・青柳(2003)²⁰⁾、大久保(2004)¹⁸⁾、大久保(2005)¹⁶⁾、磯部・上村(2007)¹⁷⁾等に基づき、「大学生個人と大学という環境の相互作用」と定義する。

芳野・豊嶋・清(1986)は、大学1年時に充実感や所属集団への適応感を持っている大学生は、所属校での大学生活に対するモチベーションがあり、卒業までの大学生活を適応的に過ごせる可能性が高いことを示

した²¹⁾。このことから、大学入学後、より早い段階で大学適応感を形成することが、その後の大学生活への適応につながり、中退の危機を回避することができると考えられるため、本研究の対象者は大学新入生とする。

III. 方 法

1. 研究対象者

関東圏内の医療系私立大学の新生219名（男子64名、女子155名）。

2. 調査方法

新入生が大学入学後から2か月程度経過した時点で、講義終了後の休み時間に質問紙を一斉配布し、回答を求めた。質問紙は無記名であるが、複数の質問紙を実施したため、データを対応させるために、被験者には学籍番号の記入を求めた。

3. 調査内容

大学適応感の測定については(a)青年用学校適応感尺度30項目(大久保、2005)¹⁶⁾を、大学適応感に影響を及ぼすと考えられる大学生活の要因の測定については(b)大学生用学校生活尺度24項目(大久保他、2010)²²⁾を用いた。

4. 調査期間

平成26年7月4日～7月18日

5. 分析方法

統計ソフト SPSS Statistics 22にデータを入力し、(a)および(b)に対して、因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行い、(a)について抽出された各因子を従属変数、(b)について抽出された各因子を独立変数とし、それぞれ重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。

6. 倫理的配慮

本研究は群馬パース大学研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号:PAZ14-24)。調査対象者には研究の目的及び調査内容、方法、自由意思による研究協力、中止の自由の保証、公表方法、データの管理方法、破棄の時期と方法について文書と口頭で説明し、同意書の署名を持って同意の意志を確認した。

IV. 結 果

1. 青年用学校適応感尺度の検討

大学への適応感尺度30項目について、因子分析を行った。全30項目について正規分布が確認されたため、方法は最尤法を選択した。また、本尺度は青年の学校適応に関する項目から成り立っているため、抽出される因子間にある程度相関があることが想定されたため、回転方法は斜交回転を選択、プロマックス回転と直接オプティミム回転を実施した。直接オプティミム回転を実施した際、因子負荷量が複数の因子に渡って0.4を超える項目が多数見られ、因子負荷量が0.4を下回る項目がプロマックス回転実施時と比べて多かったため、回転方法としては不適當であると判断し、プロマックス回転を選択した。最尤法・プロマックス回転による因子分析を実施し、5因子が抽出された。30項目中、因子負荷量が0.4に満たなかった第III因子「周り助け合っている」「周りに共感できる」、第IV因子「熱中できるものがある」について除外し、再度同法で因子分析を行った。その結果、5因子が抽出され、27項目すべての因子負荷量は0.4以上の負荷量を示し、かつ27項目が2つの因子にまたがって0.4以上の値を示さなかった。それぞれの因子は以下のように命名した。第一因子は「幸せである」、「安心する」、「ありのままの自分を出している」等、ありのままの自分であることを受け入れられ、幸福感や安心感を得られていることを表す項目からなっているため、「安心して自分らしさを出している感覚」と命名した。第二因子は「周囲から必要とされていると感じる」、「周囲から関心を持たれている」、「周囲から期待されている」等、周囲に受け入れられ、信頼されているという感覚を表す項目からなっているため「周囲に信頼され、必要とされている感覚」と命名した。第三因子は「将来役に立つことが学べる」、「やるべき目的がある」、「これからの自分のためになることができる」等、大学生活に課題や目的を見出し、充実感を得ている様子を表す項目からなっているため「課題や目的の存在」と命名した。第四因子は全て逆転項目で、「自分だけだめだと感じる」、「役に立っていないと感じる」、「自分が場違いだと感じる」等、周囲との関係において劣等感を表す項目からなっているため「劣等感の低さ」と命名した。第五因子は「周囲に溶け込んでいる」、「周囲となじめている」、「周りの人と楽しい時間を共有している」等、周囲に溶け込み、なじめていることから生じる気楽さや

表1 青年用学校適応感尺度因子分析（最尤法・プロマックス回転）

パターン行列	因子				
	1	2	3	4	5
28 幸せである	.985	-.088	.019	.027	-.051
29 安心する	.950	.018	.040	.036	-.045
27 リラックスできる	.820	-.045	.072	-.045	.016
22 充実している	.615	.009	.049	.053	.284
21 ありのままの自分を出せている	.504	.116	-.193	-.049	.263
14 好きなことができる	.428	.227	.142	.040	.088
11 周りから必要とされていると感じる	-.078	.844	.090	.039	.070
15 周りから関心を持たれている	-.128	.745	-.084	-.035	.176
7 周りから期待されている	-.018	.686	.187	-.046	-.154
3 周りから頼られていると感じる	-.120	.620	.065	.008	.290
23 良い評価がされていると感じる	.361	.609	-.155	-.025	-.150
19 存在を気にかけてられている	.196	.550	-.047	.085	.020
2 将来役に立つことが学べる	-.030	-.179	.774	-.092	.112
10 やるべき目的がある	-.012	.118	.765	.087	.040
6 これからの自分のためになることができる	.026	.054	.749	-.056	-.025
18 成長できると感じる	.183	.151	.569	.018	-.035
8 自分だけだめだと感じる	-.097	-.136	-.083	.715	.246
4 周りに迷惑をかけていると感じる	.331	.055	-.101	.703	-.006
16 嫌われていると感じる	.041	-.097	.103	.613	-.154
24 自分が場違いだと感じる	-.158	.043	-.084	.595	-.057
12 役に立っていないと感じる	-.082	-.186	.160	.562	-.012
20 周りから指示や命令を出されているように感じる	-.176	.293	-.025	.452	-.109
1 周囲に溶け込んでいる	-.045	.005	.091	.040	.926
5 周囲となじめている	.105	.081	.010	-.011	.739
9 周りの人と楽しい時間を共有している	.169	-.001	.031	-.030	.619
17 自分と周りがかみ合っている	.054	.097	.015	.018	.543
13 自由に話せる雰囲気である	.213	.081	-.037	-.115	.483
クロンバック α 係数	.919	.870	.894	.844	.788
因子相関行列					
第二因子	.607				
第三因子	.415	.439			
第四因子	-.425	-.459	-.252		
第五因子	.689	.680	.486	-.483	

快適さ、居心地の良さの感覚を表す項目からなっているため「居心地の良さの感覚」と命名した。クロンバックの α 係数は第一因子が.919、第二因子が.870、第三因子が.894、第四因子が.844、第五因子が.788であり、内的整合性の観点からの信頼性は十分であると考えられる。

2. 大学生用学校生活尺度の検討

大学生生活の要因24項目について、因子分析を行った。全24項目について正規分布が確認されたため、方法は最尤法を選択した。また、本尺度は大学生が学生生活において経験する出来事に関する項目から成り立っているため、抽出される因子間にある程度相関があることが想定されたため、回転方法は斜交回転を選択、プロマックス回転と直接オブリミン回転を実施した。直

接オブリミン回転を実施した際、因子負荷量が複数の因子に渡って0.4を超える項目が多数見られ、因子負荷量が0.4を下回る項目がプロマックス回転実施時と比べて多かったため、回転方法としては不相当であると判断し、プロマックス回転を選択した。最尤法・プロマックス回転による因子分析を実施し、4因子が抽出された。24項目中、第四因子「勉強でわからないことはそのままにしない」が因子負荷量0.4に満たなかったため削除し、再度同法で因子分析を行った。その結果、全ての因子負荷量は0.4以上の負荷量を示し、かつ23項目が2つの因子にまたがって0.4以上の値を示さなかった。それぞれの因子は以下のように命名した。第一因子は「気軽に話しかける友人がたくさんいる」、「仲の良い友人がたくさんいる」、「友人と一緒にいると楽しい」等、友人との良好な関係を表す項目からなって

表2 大学生生活尺度因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

パターン行列	因子				
	1	2	3	4	5
5 気軽に話しかける友人がたくさんいる	.942	-.163	-.032	.011	
1 仲の良い友人がたくさんいる	.906	-.078	.030	-.032	
20 友人と一緒にいると楽しい	.681	.047	-.006	-.059	
9 悩みを打ち明けあえる友人がいる	.627	.086	.077	-.127	
13 友人は私の気持ちをわかってくれる	.593	.149	-.018	-.030	
23 同じことに興味を持っている友人がいる	.548	-.062	-.040	.179	
17 友人に好かれている	.475	.167	-.050	.165	
10 先生は学生の気持ちをわかってくれる	-.110	.888	.048	-.070	
6 先生は学生の言うことを真剣に聞いてくれる	.053	.712	.058	-.150	
18 先生はわかりやすく教えてくれる	-.127	.693	-.089	.100	
14 困っているときに先生は励ましてくれる	-.066	.640	-.041	.057	
2 先生は学生の相談に乗ってくれる	.108	.639	.016	-.149	
21 先生は学生に公平に接してくれる	.139	.553	.006	.068	
22 先生の言うことをきちんと守っている	.062	.470	.060	.181	
19 授業の内容を理解している	.083	.444	-.082	.215	
11 サークルや部活動をやることにやりがいを感じる	.003	.033	.902	-.003	
15 自分のサークルや部活動は仲の良い集団である	.032	-.022	.862	-.013	
3 サークルや部活動には自主的に参加している	-.036	-.091	.835	.141	
7 自分のサークルや部活動は希望して入ったところである	-.013	.058	.753	-.075	
8 一生懸命勉強している	-.019	-.102	-.003	.937	
4 成績を上げるために努力をしている	-.049	-.055	.028	.896	
16 授業をまじめに受けている	-.001	.193	-.024	.596	
12 勉強に楽しく取り組んでいる	.132	.170	.093	.477	
クロンバック α 係数	.873	.856	.901	.847	
因子相関行列					
第二因子	.495				
第三因子	.418	.351			
第四因子	.444	.510	.331		

いるため「友人との関係」と命名した。第二因子は「先生は学生の気持ちをわかってくれる」、「先生は学生の言うことを真剣に聞いてくれる」、「先生は学生の相談にのってくれる」等、教員との良好な関係を表す項目からなっているため「教員との関係」と命名した。第三因子は「サークルや部活動をやることにやりがいを感じる」、「自分のサークルや部活動は仲の良い集団である」、「サークルや部活動には自主的に参加している」等、サークルや部活動に対する取り組みに関する項目からなっているため「クラブ・サークル活動への参加」と命名した。第四因子は「一生懸命勉強している」、「成績を上げるために努力している」、「授業をまじめに受けている」等、学業に対する取り組みを表す項目からなっているため「学業への取り組み」と命名した。クロンバックの α 係数は第一因子が.873、第二因子が.856、第三因子が.901、第四因子が.847であり、内的整合性の観点からの信頼性は十分であると考えられる。

3. 大学生生活要因が大学適応感に及ぼす影響

(a)の各因子の得点を従属変数、(b)の各因子の得点を独立変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。「安心して自分らしさを出している感覚」に対しては「友人との関係 ($\beta = .628, p < .001$)」「教員との関係 ($\beta = .231, p < .001$)」が、「周囲に信頼され、必要とされている感覚」に対しては「友人との関係 ($\beta = .515, p < .001$)」「教員との関係 ($\beta = .176, p < .01$)」「学業への取り組み ($\beta = .119, p < .05$)」が、「課題や目的の存在」に対しては「学業への取り組み ($\beta = .301, p < .001$)」「友人との関係 ($\beta = .215, p < .01$)」「教員との関係 ($\beta = .223, p < .01$)」が、「劣等感の低さ」に対しては「友人との関係 ($\beta = -.331, p < .001$)」「学業への取り組み ($\beta = -.163, p < .05$)」が、「居心地の良さの感覚」に対しては「友人との関係 ($\beta = .773, p < .001$)」「教員との関係 ($\beta = .097, p < .05$)」が、独立変数として投入された。

表3 重回帰分析結果 (ステップワイズ法)

安心して自分らしさを出せている感覚 (β)		
友人との関係	.628***	
教員との関係	.231***	
調整済み R ²		0.578
周囲に信頼され、必要とされている感覚 (β)		
友人との関係	.515***	
教員との関係	.176**	
学業への取り組み	.119*	
調整済み R ²		0.460
課題や目的の存在 (β)		
学業への取り組み	.301***	
友人との関係	.215**	
教員との関係	.223**	
調整済み R ²		0.347
劣等感の低さ (β)		
友人との関係	-.331***	
学業への取り組み	-.163*	
調整済み R ²		0.175
居心地の良さの感覚 (β)		
友人との関係	.773***	
教員との関係	.097**	
調整済み R ²		0.673

*p<.05、**p<.01、***p<.001

V. 考 察

本研究では、大学適応感を「大学生個人と大学という環境の相互作用」であると定義した。そして、中退率が全体の数値を上回る医療系の大学において、その後の大学適応を左右する時期である大学入学直後の学生を対象とし、大学生活における要因と大学適応感の関係を検討した。

因子分析の結果、大学適応感については、「安心して自分らしさを出せている感覚」、「周囲に信頼され、必要とされている感覚」、「課題や目的の存在」、「劣等感の低さ」、「居心地の良さの感覚」の5因子が、大学生活の要因については「友人との関係」、「教員との関係」、「クラブ・サークル活動への参加」、「学業への取り組み」の4因子が抽出され、大久保(2005)¹⁶⁾や磯部・上村(2007)¹⁷⁾等の先行研究と同様の因子が得られた。その理由として、これらの先行研究が対象としたのが、

心理学や保育学、教育学などのヒューマンサービスを専攻する大学生であったという本研究との共通点があったことが挙げられる。

また、大学適応感の各因子を従属変数、大学生活における要因の各因子を独立変数とした重回帰分析の結果、他の学部・学科と同様に(e.g. 磯部・上村, 2007)¹⁷⁾、医療系の大学新入生にとっても「友人との関係」が学校適応感のどのような側面に対しても、強い正の影響を及ぼす要因であることが明らかになった。また、「クラブ・サークル活動への参加」は、1年生の早期の段階では、大学適応感に影響を及ぼさないことも明らかになった。

適応感ごとに見ると、「安心して自分らしさを出せている感覚」に対しては「友人との関係」、「教員との関係」が正の影響を及ぼしていた。これは、大学生活において他者に開示することがためらわれるような自分の側面をも開示し、自分らしく振る舞うためには大学における対人関係の対象である友人や教員と良好な関係を持つことが影響を及ぼすためと考えられる。「周囲に信頼され、必要とされている感覚」に対しては「友人との関係」「教員との関係」「学業への取り組み」が正の影響を及ぼしていた。これは、大学生活において被信頼感や被受容感を感じるためには、大学における対人関係の中心である友人や教員との間に良好な関係を築くことが影響を及ぼすことはもちろんであるが、それに加え、「グループワーク等で自分の役割を果たし、グループに貢献する」、「宿題を期日までに終わらせ、提出する」等、学業面において周囲に遅れることなく課題をこなしていくことも影響を及ぼしていると考えられる。「課題や目的の存在」に対しては「学業への取り組み」「友人との関係」「教員との関係」が正の影響を及ぼしていた。これは、学業に取り組むことに加え、友人が学業へ取り組む姿勢を見たり、友人と学業で競ったりすることや、教員に学業や進路に関する相談をし、助言や激励を受けることが、学業における課題や目的を意識することに影響を及ぼしているためと考えられる。「劣等感の低さ」に対しては「友人との関係」、「学業への取り組み」が負の影響を及ぼしていた。これは、大学生活において、周囲に遅れることなく学業をこなすことができれば、友人に対してひけ目を感じることなく良好な関係を持つことができ、それがあまり劣等感をもたないで済むことに影響を及ぼすと考えられる。「居心地の良さの感覚」に対しては「友人との関係」、「教員との関係」が正の影響を及ぼ

していたが、特に「友人との関係」の影響が強かった。これは、この因子を構成する項目が友人との関係において、周囲に溶け込め、なじんでいることから生じる気楽さや快適さや居心地の良さを想起させるものであるためであると考えられる。

以下では、上述の医療系大学における5つの大学適応感を“大学という環境に自分の居場所を見だし、人間関係を形成していく過程”と“学業や大学での活動に対する態度”という二つの側面に分けて、それらに影響を及ぼす要因について考察を行う。

1. 大学という環境に自分の居場所を見だし、人間関係を形成していく過程について

大学への適応感尺度27項目について、最尤法による因子分析（プロマックス回転）を行った結果得られた5因子のうち、第一因子「安心して自分らしきを出せている感覚」、第二因子「周囲に信頼され、必要とされている感覚」、第五因子「居心地の良さの感覚」の3因子は大学という環境に自分の居場所を見だし、人間関係を形成していく過程における適応感であると考えられる。

医療系の大学に限らず、進学先の大学に知人が一人もいないという学生は多いであろう。大学という新しい環境に適合していくためには、まずは新たに対人関係を築く必要がある。そのため、これらの3因子においては「友人との関係」「教員との関係」という大学内の主要な対人関係に関する要因が正の影響を及ぼしていると考えられる。その中でも、第二因子「周囲に信頼され、必要とされている感覚」については、「友人との関係」、「教員との関係」に加え「学業への取り組み」も正の影響を及ぼしていた。これは、ヒューマンサービスを専攻する学部・学科の学生は、同級生や教員と密に接する機会が多い演習やグループワーク等の授業において、与えられた課題をこなし、集団に貢献することで、その専攻の学生としてのアイデンティティが獲得され、その専攻における被信頼感や他者から必要とされている感覚を形成すると考えられる。この傾向がヒューマンサービス、あるいは医療を専攻する学生の特徴であるかどうかについて検証するために、今後他領域を専攻する学生との比較が望まれる。

2. 学業や大学での活動に対する態度について

大学への適応感尺度27項目について、最尤法による因子分析（プロマックス回転）を行った結果得られた

5因子のうち、第三因子「課題や目的の存在」、第四因子「劣等感の低さ」は学生の学業や大学での活動に対する態度に関する適応感であると考えられる。いずれの因子に対しても「友人との関係」「学業への取り組み」が影響を及ぼしている。これは大学生活における学業等の活動に対しては、「学業への取り組み」はもちろん、同じ活動に取り組む「同級生との関係」も影響を及ぼすためであると考えられる。

第三因子「課題や目的の存在」に対しては「学業への取り組み」、「友人との関係」に加えて「教員との関係」も正の影響を及ぼしている。これは、単に学業に打ち込み、同級生と切磋琢磨するだけでなく、教員から医療現場の話の聞いたりすることが、大学生活や将来における課題や目的を自覚することに影響を及ぼすためであると考えられる。

3. まとめ

医療系大学において、大学新入生は、「安心して自分らしきを出せている感覚」、「周囲に信頼され、必要とされている感覚」、「課題や目的の存在」、「劣等感の低さ」、「居心地の良さの感覚」という大学適応感を抱くことが明らかになった。これらの適応感は“大学という環境に自分の居場所を見だし、人間関係を形成していく過程”と“学業や大学での活動に対する態度”に大別される。

“大学という環境に自分の居場所を見だし、人間関係を形成していく過程”について、従来であれば、学生主導で自然に学内のネットワークを必要に応じて構築していくことができると考えられるが、学生の多様化が進む中でコミュニケーションが苦手な学生も増加し、不適応反応の予防を見据えて人間関係づくりのきっかけを大学側が提供する必要性が高まってきたと考えられ（西村・石崎、2008）²³⁾、新入生が入学後、より早期の段階で学内において対人関係を築けるように、「新入生交流会」「新入生研修」等、同級生・在学生や教職員と接触する機会を設けている大学も多い。しかし、高下（2011）によると、それらの取り組みの有無に関わらず、大学新入生の7～9割は、入学直後の4月の時点で、周りの人を頼りにできるという信頼感を形成しており、困った時の相談資源や悩みの内容に対応する相談先を獲得している。その一方で、入学当初には家族や大学のスタッフに対して支援ニーズがあったものの、大学生活に慣れるにつれて、家族や大学のスタッフに対する期待が軽減する²⁴⁾。以上のこと

から、多くの新入生は従来通り自ら友人関係を構築し、それを維持・発展させていくことができるので、「新入生交流会」、「新入生研修」等のイベントは同級生・在学生や教職員との顔合わせの機会という位置づけで、大学側はそれほど介入的な取り組みを行わなくてもよいと考えられる。しかし、学生の多様化に伴い、一部の自ら友人関係を構築しにくい学生に対しては単にその場限りの顔合わせのイベントで終わることなく、他者との関係を構築することや、対人関係能力を向上させることを目的としたプログラムを実施することが求められる。例えば、香川大学では入学後1週間で、友人関係・在校生との関係・教職員との関係を構築できるようなプログラム（事務的なガイダンス、在校生や教職員の体験談を聴く講演会、スポーツ、レクリエーション、構成的グループエンカウンター等内容は多岐に渡る）を実施し、入学後の新入生の不安低減に効果を挙げている（西村・石崎、2008）²³⁾。また、被信頼感を形成できないと、友人や教員との接触を避け、登校意欲の低下にもつながる。被信頼感の形成には、大学内の対人関係だけでなく、学業への適応も正の影響を及ぼすため、学習面で躓きのある学生への個別の学習支援も重要な取り組みである（詳細は後述）。

“学業や大学での活動に対する態度”について、周囲に遅れをとることなく、学業に積極的に取り組むことが影響を及ぼすと考えられる。大学全入時代と言われる近年、学習意欲が低い学生やその大学で学ぶための基礎学力が身につけていない学生が入学してくることも考えられるが、その中には本人の意欲不足や怠慢のために基礎学力が身につけていない学生もいれば、発達障害傾向のために学業へ適応できない学生もいると考えられる。学習面で躓きのある学生に対しては、その原因を精査し、発達障害傾向に起因することが想定される場合は、当該学生の同意を得た上で、高校までの特別支援教育で行われているような、その学生の発達上の特徴に合わせた合理的な支援（例えば、板書が苦手な学生に対しては黒板をスマートフォン等で撮影することを許可する、聴覚的な情報処理が苦手な学生に対しては一度に言葉で指示する量を減らし、視覚的な手がかりも与える、比喩や抽象的な表現の理解が苦手な学生に対しては、短く・具体的で明確な指示を与える等、その学生の発達上の偏りに合わせたオーダーメイドの支援）を行う必要がある。

4. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、全体の退学率と比べ、退学率が高い医療系の大学生を対象とした。しかし、前述の通り、学部・学科によって大学適応感やそれに影響を及ぼす大学生生活要因は異なると考えられる。本調査の対象は医療系の学部の学生であったが今後は他の学部や、さらには学科や専攻ごとにも同様の調査を行う必要がある。

本研究においては、前述の分析後、データを学科別に分けて同様の分析を行ったが、学科間において傾向に違いは見られなかった。これは、大久保(2005)¹⁶⁾は、学校ごとに学校適応感が異なることを指摘しているように、同じ学校の中では学部や学科の影響は少なく、そのために適応感に違いが見られなかったと考えられる。同じ学部・学科について複数の大学を比較し、学力や地域性などを考慮した検証が必要である。

また、本研究はその後の大学適応感に影響を及ぼすと考えられる入学直後の大学適応感について調査した。今後は、入学直後と1年次終了時の大学適応感の比較や、学年間の適応感の比較など、縦断的・横断的研究を行うことも望まれる。

付記

本研究は、平成26年度群馬パース大学特定研究費の助成を受けて行った。

謝辞

本研究の趣旨を理解し、研究協力をしてくださった被験者の方々に心から感謝申し上げます。本研究の成果が、一人でも多くの大学生の大学適応感の形成や中退の危機の回避に役立つよう、更なる研究を推進します。

VI. 引用文献

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所 (2015). 人口統計資料集 (2015) http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P_Detail2015.asp?fname=T11-03.htm (2016年2月13日取得)
- 2) 文部科学省 (2015). 平成26年度学校基本調査 (確定値) について http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afiedfile/2014/12/19/1354124_1_1.pdf (2015年12月19日取得)
- 3) 中村 真・松田英子 (2013). 大学生の学校適応に影響する要因の検討—大学不適応、大学満足、就学

- 意欲に着目してー 江戸川大学紀要, 23, 151-160.
- 4) 日本私立学校振興・共済事業団私学経営相談センター (2005). 学校法人基礎調査
- 5) 内田千代子(2008). 学生の健康白書2005 国立大学法人保健管理施設協議会 331-354.
- 6) 読売教育ネットワーク (2015). AO入試6人に1人は退学!? 「大学の實力」から(5)
<http://kyoiku.yomiuri.co.jp/torikumi/jitsuryoku/yomitoku/contents/ao-61-5.php> (2015年3月9日取得)
- 7) 朝日新聞DIGITAL (2014). 朝日新聞×河合塾共同調査「ひらく 日本の大学」 2014年度調査報告
<http://www.asahi.com/edu/hiraku/article11.html> (2016年2月13日取得)
- 8) 日本中退予防研究所(2010). 中退白書2010 高等教育機関からの中退 NPO 法人 NEWVERY
- 9) 文部科学省(2014). 報道発表 学生の中退学や休学等の状況について http://www.mext.go.jp/b-menu/houdou/26/10/_icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf (2014年9月25日取得)
- 10) 井上麻衣・久田 満 (2015). 大学生における所属大学へのコミュニティ感覚一測定尺度の開発と関連要因の検討ー 上智大学心理学年報, 39, 53-60.
- 11) 独立行政労働法人労働政策研究・研修機構(2006). 大都市の若者の就業行動と移行過程ー包括的な移行支援に向けてー <http://www.jil.go.jp/institute/reports/2006/072.html> (2016年2月13日取得)
- 12) 内田千代子 (2014). 大学における休・退学、留年生に関する調査 第34報 第35回全国大学メンタルヘルス研究会報告書, 1-8.
- 13) 太田裕一・桜井育子 (2003). コミュニティと危機介入ーふたつのキャンパスの学生相談における比較ー 学生相談研究, 24, 119-228.
- 14) 大学中退就職ガイド(2014). 大学中退理由で最も多いのは経済的理由!? <http://大学中退就職.com/news/dropouts/investigation-of-dropouts-in-2014.html> (2016年4月25日取得)
- 15) 大久保智生・青柳 肇(2004). 中高生用学校生活尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 日本福祉教育専門学校紀要, 12, 9-15.
- 16) 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因ー青年用適応感尺度の作成と学校別の検討ー 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 17) 磯部有希・上村佳世子 (2007). 大学への進学同期と学校適応感との関連 文京学院大学人間学部研究紀要, 9(1), 51-61.
- 18) 大久保智生(2004). 新入生における大学環境への主観的適応に関するPAC(個人別態度構造)分析パーソナリティ研究, 13, 44-57.
- 19) 谷井淳一・上地安昭 (1994). 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 教育心理学研究, 42, 185-192.
- 20) 大久保智生・青柳 肇 (2003). 大学生用適応感尺度作成の試みー個人ー環境の適合性の視点からーパーソナリティ研究, 12, 38-39.
- 21) 芳野晴男・豊嶋秋彦・清 俊夫 (1986). 大学生の適応に関する長期追跡研究ー4年時の適応感に関わる1年次の三時点の諸要因 (I)ー 弘前大学文化紀要, 24, 1-23.
- 22) 大久保智生・川田 学・江村早紀・折田祐希(2010). 大学新入生の自律的進学動機が大学生活への適応に及ぼす影響 香川大学研究紀要, 7, 71-87.
- 23) 西村昭徳・石崎一記 (2008). リレーションを重視したオリエンテーションが新入生の大学生生活適応感に及ぼす影響 東京成徳大学人文学部紀要, 15, 51-60.
- 24) 高下 梓(2011). 大学新入生の適応感の変化ー4月から7月にかけての初期適応過程ー 明星大学心理学年報 2011, 29, 9-19.

Abstract

The prevention against college students' leaving school is one of the pressing problems to university education in Japan. As factors of leaving school have a wide variety, I focus on freshmen's feelings of adaptation to university which are also psychological factors, and make clear what factors in college life have influences on students' feelings of adaptation to university. The subject of this study are freshmen at medical universities.

This study made it clear that freshmen hold senses of adaptation to university such as "a sense of being able to express themselves at college without anxiety", "a sense of being trusted and needed by others", "a sense of having a theme and a purpose for college life or study", "a sense of feeling less inferior complex" and "a sense of feeling quite at home in college". These adaptation senses are roughly divided into two categories: "the process of which freshmen find their places and form their human relationship in the college" and "their attitude toward study and activities at the college". This study found that factors such as "a relation with friends" and "a relation with teachers", which are the main interpersonal relationships at college, had positive influences on the former category and that besides two factors, a factor "working on study" also had positive influences on the latter.

Key words: feelings of university adaptation, college life factors, freshmen,
the medical university

